

IV. 生徒会活動から

報告!! '96学校祭開会式アトラクション

——高校執行部「エイサー」の取り組みに——

96年度生徒部
滝 口 恵 子

【学校祭/開会式】

例年、本校の学校祭は秋に開催される。

開会式の幕開けは、高校執行委員長の開会宣言からである。毎年開会宣言の前に行われるアトラクションは、全校生徒の思いが一つとなる感動の幕開けを盛り上げるのに欠かせない、一大イベントである。学校祭の成否は“開会式で決まる”とまで云われる緊張の瞬間である。例年そこでは、中・高合同によるプラスバンドの演奏、有志生徒によるパフォーマンス…等々様々な催しがなされていた。

1996年度学校祭開会式では、「沖縄エイサー」のアトラクションによる幕開けとなった。それは感動の幕開けにふさわしい開会式アトラクションとなり、新聞による取材、掲載までしていただいた。その「沖縄エイサー」を通して、多くの方々との交流や協力、生徒たちの取り組みの過程を経過を追いながら報告したい。

【'96前期執行部】

毎年学校祭を担当する執行部は大変な重圧を抱えながら活動をスタートする。当然96年度前期執行部もその例にもれない。4月当初より開会式アトラクション出演者については、格別の配慮をしながら企画を温めていた。そのお陰か、予想外に順調な気配であった。開会式は、設立間もない中高合同のサークルが発表することで早々に決定した。全校生徒の期待が集まり失敗が許されない開会式アトラクションへ、執行部員自らが出演する事だけは避けたいという思いがあったようである。何故なら記憶に新しい、前年の95年度前期執行部員は様々なアクシデントに見舞われながらもアトラクション「和太鼓」で開会式を大成功に飾り、賞賛を浴びた。それに対して比較に耐えられる内容を作り上げる自信が96年度執行部にはなかったからである。本音を云えば、担当の私自身にも同じ思いがあった。

【開会式アトラクション再検討】

6月に入ると96年度学校祭方針が具体化し、一般生徒による各企画やHR活動等々の動きが始まっていた。間もなく始まる1学期期末試験をひかえ、様々な活動が一時小休止する頃、…執行部員は難なくテストを乗り切ることが目先の課題であり、執行部はテスト終了後から学校祭「本番」の取り組みをスタートさせる計画でいた。

そんな時期、思わぬ計画変更の話が持ち上がったのである。アクシデントは予期出来ぬものである。

突然、開会式での発表サークルから、充分な時間がとれる「閉会式での発表」への申し出があり、開会式アトラクション内容について再検討を迫られてしまった。

95年度同様の問題発生である。それでも、その年の和太鼓のように大成功をおさめられれば良いが、96年度執行部として、そこまでの取り組みをする余裕も、自信もなく、荷の重さに耐えられない事に気付いていた。穴埋め策は一般生徒から候補を見つけだすしか解決策がない。校内を奔走して候補になりそうな妥当なグループや様々な生徒に交渉を試みたが解決の様相は全く出てこなかった。時間的余裕も選択肢も無く、最終的に執行部が担当するという苦渋に満ちた結論しか、残されていなかった。

4月誕生の新執行部として初めて暗礁にぶつかり、突如名案が見つかるはずもなく、些かの時期的余裕もない状況では何等の解決策も見いだせていなかった。

問題発生は試験一週間前であった。土曜日の午後でもあり校内は閑散とし、他執行部員も大半はテストに備え下校していた。残っていたのは委員長、書記の2名だけ。高校に遅れてスタートする中学の定期テスト日程の関係で中学部活動はその日も活発にトレーニングしていた。その顧問教官に相談を持ちかけ、「能や狂言、三河漫才、謡や長唄等はどうか…」と助言を受け、前年度の和太鼓同様、名大サークル

に指導を乞う道を探る事になった。

その助言によって、より良く解決の道筋がつけられる様な安堵感が委員長・書記だけでなく担当の私のなかにも広がった。

しかし、執行部員2名で電話の横に座り込み、次々と電話をし受話器を握り続けたが、それらのサークルは名大には皆無であり、打つ手が見つけられなかつた。

解決策を話し合っている途中、その日の午前の総合人間科「テーマ授業」文化班「ロックから探る若者文化」で取り上げた“ワールドミュージックオキナワンドミュージック”沖縄研究旅行第2日目企画“喜納昌吉ライブ”に話が及んだ。

「今、沖縄が熱く燃えている、オキナワ関係で“何か”が出来れば…、9月には基地使用に関する沖縄県民投票もあり、学校祭も9月でタイムリー…」な発表になるのではないかと会話が盛り上り…と、同時に彼らは分厚い電話帳を横に、再度各所に電話攻勢を始めていた。沖縄物産店から個人、個人から団体、団体から個人…と紹介されるままに一体、何本の通話をしただろうか。次第に沖縄の民謡や舞踊、文学、はたまた飲み屋紹介にまで‘講義’が及び、電話による即席沖縄学習を受ける事となった。市内在住沖縄出身の方々から、様々なアドバイスをいただき、タイミング良く、翌日の“沖縄文化祭典”的紹介まで受けたのである。そこでは沖縄芸能の全てが披露されるという。

私個人としても、96年3月に出かけた沖縄研究旅行下見の際に見た勇壮な“エイサー”を再度見られるかと思い、大変興味があった。が、執行部員の彼らがそこで何を感じ、何を考えつくのか…どの様な結論を出すのか楽しみであった。

【沖縄文化祭典】

翌日出かけた“沖縄文化祭典”的会場からは、楽屋や舞台からもれてくる笛や太鼓、三線（サンシン）の音で溢れ、正に異国情緒たっぷりの風情が見るものを圧倒した。目的を忘れ、次々と演じられる沖縄芸能に見とれていたが、その間、執行部員はしっかりと記録ビデオ取材をしていた。特異な装束とダイナミックな振り、大太鼓で現れたエイサー隊、カチャーシーに彼らは引き込まれ、「これだ」と確信したようであった。出かけていく迄、開会式を執行部自ら演じる不安が多分にあったようだが“エイサー”を見、会場で沖縄県人会の方々と接し、明快な結論を見い出す事が出来たのだろう。

【学校祭アトラクション“エイサー”決定】

——沖縄のエイサーは大きな太鼓を振り回しながら

の激しく、難しい踊りである。本来、沖縄の旧盆の行事で若者らが夜通し踊り続けるものであるが、今では事ある度に舞い踊られている。『血湧き、肉踊り、骨が鳴る』と形容されている。シマンチュは沖縄のその季節、老いも若きも遠くから聞こえるエイサー太鼓の音にチムドンドンするという……

会場で“エイサー”を見た生徒たちは「単純な振りと太鼓の扱いは、素人でもマスターできる。」「1～2回教えてもらえば充分マスターできる。」「案外、簡単…。」「開会式に相応しい。」と評し、“エイサー”に取り組むことが決定した。

音や動きに格別疎い私は、彼らの「案外簡単…」という言葉に不安を感じたが、四六時中、音やリズムに囲まれて生きている生徒たちにとっては、発言通りに「案外、簡単」と彼らの出した結論に委ねることにした。

【豊田沖縄黒潮エイサー同好会との出会い】

彼らは試験終了後の次の日曜日、エイサー練習所へ出かける交渉を済ませ、1週間後の日曜日には、ビデオで練習風景を記録し、サンシンや唄をテープにとり、練習に加えてもらい、実際に太鼓をかつぎ、バチ裁きまで指導を受けてきた。生徒達は同行できなかった私にビデオを見せながら、曲を口ずさみ、バチ裁きや振りを再現して見せてくれたが、予想以上のその行動力やリズム、音感の良さに驚かされた。そして、「案外簡単」と評した“エイサー”は前年の和太鼓以上のものにはならないにしても、執行委員長開会宣言だけで他に何も用意できないという非常事態を、回避出来るだけでもありがたいものだった。

練習に割り込み、迷惑をかけたにも関わらず昼食、飲み物、沖縄の珍しいおやつ迄頂いた事を生徒たちは「奇妙なサービス」と感じていた。次回の練習に出かけた際、授業料の「月謝」を請求されるかもしれない云うのである。沖縄文化祭典会場でその件は確認済みであったが、彼らは「格別」に歓待されたことを「奇妙」なものと捉えていた。体裁だけでも取り繕ろえる開会式を、急遽、演出出来た筈の「名案」が、思わぬ方向に向くかも知れない“金銭が絡む”不安を抱え始めていたのであろう。

責任は果たし、後は生徒に頑張ってもらうだけと践んでいた私だが、生徒の云う心配が現実のものかどうか、偵察も必要と、挨拶を表す次の練習会の際、生徒に同行してみた。そこでは、乳飲み子から小中学生、老婦人等々の人々が集まっていた。午後からの練習会であった。それぞれの家庭で作ってきたであろう手作りの沖縄食が、遅い昼食として出された。

静岡から毎週練習に来ているという団体は、その沖縄食が一番の目当てのように食事会に加わっていたが、生徒たちも私の目を気にしながら、つまみ喰いを始めていた。場が和んだ一瞬に、月謝の件を切り出してみたが、何も心配はいらないと言う。公共の施設借用をしての練習会だが施設料も含め一切は同好会で負担、運営し、会員以外の参加も無料で「大歓迎」との返事を受けた。そのような練習生は我々以外にも10数名加わっていた。

生徒たちがお世話になったのは「豊田沖縄黒潮エイサー同好会」である。豊田在住沖縄県出身者、その2世、3世で作っている非営利の同好の仲間が中心になり、沖縄に興味を持っている県内外の人たちも加わって毎週練習を重ね、様々なイベントでエイサーを披露している団体である。

その後、開会式当日も含め、約3カ月の間、大変お世話になった方々である。また、そこでは練習に参加している名大の教授や県立高校の教員、私の前々任校卒業生の保護者等々、意外に身近な存在の方々との巡り会いや再会もあった。

毎回、練習は90分を2度行い、間の休憩は20分であった。見ていて暫くすると足下が冷えてくるほどしっかりクーラーの利いた会場であったが、練習が始まつて間もなく、生徒も先生も、他の参加者も足下に汗が落ち、それに足を取られて滑りかける、練習用に着替えたTシャツに汗が滲み、抱えた太鼓を吊った紐にまで汗が滲みきていた。生徒の云う「案外、簡単なエイサー」も実は全くの見当違いで、次第に本格的な練習でしごかれ始めていた。

エイサーには左右対称の動作は一切無い。体の総てを同時に、それぞれに違う動きを作る「型」がある。その型が決まらず生徒たちは苦労していた。息が切れるほどであっても、大声でかけ声を出さなければならない。90分の練習時間中、附属生は誰一人として音を上げるものはいなかった。それどころか目付き、表情が真剣になっている。休憩時間には既にバチを持つ手の皮膚が擦れて、傷ついていた。練習の帰り道、「案外、簡単なエイサー」と評した委員長は、他執行部員に話が違うと責められたのは当然であろう。簡単そうに見えることも、自らやってみて、初めて事の難しさが解るというものであろう。エイサーの選択は間違いだったと云う本音も聞こえ始めていたが、もう後戻り出来ない段階であることを、生徒たちの誰もが気付いていた。1～2回も習えばマスターできると践んでいたはずだったが、一夏かけて練習しても、とてもマスターできそうにない難しさを既に感じ、結局毎週日曜日、豊田まで通い詰める覚悟をする事となった。

【エイサー特訓】

記録してきたビデオをもとに、太鼓代わりの空き缶の蓋と、バチ代わりの角材で、学校で毎日1時間の練習が始まった。次回練習日迄に習ってきたことは仕上げておかねばならない。

毎回の練習会で努力を認められ、特性の太鼓とバチを人数分貸し出して下さるまでになった。そのお陰でその後の学校での練習は、次第に熱を帯びてきた。

指の皮膚が破れ、痛々しい様相も、簡単なテーピングをする程度で練習に支障がなくなりつつある頃、日曜日になると出かけていく生徒に興味を持ったその家族、太鼓の運搬をかって出る父親、エイサーを見たいという母親が練習場に現れるようになっていた。毎回の練習日には2～3台のワゴン車で、親同士交代で豊田までの送迎をしていただけるようになってしまった。練習を参観し、生徒の動きや振りに注文を付け、親同士の批評会が始まる。生徒だけでなく、保護者を巻き込んでの練習会になる場面も度々であった。

単身赴任先から週末、家族団欒の為に帰省をしても、全員揃わない…ならば、豊田の練習場まで家族ドライブがてら出かけてみようと提案したある生徒の父親は、練習場の様子や生徒の取り組みを、翌週新聞の記事で紹介して下さった。

親や兄姉の理解や協力、諸々の期待や励ましに支えられ、益々生徒の練習は厳しいものになっていた。日々の練習では、後半お互いにテストを行う。パスでき無いものは居残り練習をし、合格するまで休憩が与えられない。教科学習でもそれほどの厳しい指導がなされる機会はないだろう。

暑い最中のことであるから、早めにテストにパスし、水が飲める休憩に入りたいと、一心不乱に舞い踊るが、腕の振りが弱い…、太鼓の音の乱れがある…、かけ声が小さい…と、お互いの批評は大変に手厳しい。11名の中には、自主テストに備え、帰宅後もフライパンとバチ代わりの擂り粉木片手に家族の前で練習を重ねたものも居たようである。フライパンをたたく音とかけ声、床を踏みならす騒音に夜毎、耐えた家族も多かったかも知れない。

【9月新学期】

9月新学期が始まると夏休みのようにはエイサーの練習は出来なくなっていた。いよいよ間近となった学校祭に向けて、執行部員11名には各自の担当企画があり、それぞれのH.Rでの役割もある。執行部作成の垂れ幕の追加補修もあるし、記念マスクット「張りぼて」の制作も台風や大雨に泣かされ、思うように作業は進

んでいなかった。エイサーの練習時間はとれなくなっていたときに生徒部長より、「学校祭の成否は幕開けの開会式で決まる、その程度の踊りでは開会式の空気が弛れる…」と、一言苦言を呈された。

その一言に大変ショックを受け、授業前時間を有効利用する話し合いがもたれ、翌日から再び、早朝エイサー練習を始めた。

夏休み、「エイサー活動」が新聞記事にされたことで、新学期にも他新聞の取材申し込みもあった。カメラ撮影もインタビューも、初めての経験であろう。

エイサー指導の先生方に「筋が良い」と煽てられ、新聞にも取り上げられた結果、責任や喜びもあったのであろうか、生徒同士での“自主テスト”や猛練習は更に厳しいものになってきていた。

豊田の練習会場でも休憩時間、先生を独占し、休憩を与えず、助言をメモに取り、11名だけ実技を見てもらう熱心な態度も出てきた。練習会に通っている間、本校のように学校祭でエイサーをに取り入れたいと志願してくる高校も数校あったが、2度目の練習にくる姿は見られなかつた。あまりに激しい練習会に音をあげてしまったのだろう。

『学校祭でエイサーを取り上げたいと弟子入り志願してきた学校は、過去にも数限りなくあった。此

処まで熱心に取り組んだ学校は他にはなかつた。練習会に加わったはじめの頃は、続かないだろうと思っていたが、今の11名のエイサーは素晴らしい出来映えだ』とほめてもらったことが、更なる練習に打ち込む意欲につながつたのだろう。

【沖縄ふれあいエイサー大会】

1996年9月8日、沖縄県民投票の当日、豊田市上郷で行われる「沖縄ふれあいエイサー大会」が開催された。そこへの参加への推薦を戴くほど、生徒たちのエイサーは上達していた。大阪や静岡など、各地の同好会が集合しての大きな大会である。

民族衣装をまとい、人前で舞い踊るのは初めての事であったが、当日は早朝から先生の指導の下、最後の仕上げ練習、衣装の気付けをしてもらい、附属生だけの出番に備えた。

当日の演出は生徒なりに事前に工夫がなされていた。中学生徒会2名が銅鑼を鳴らし、高校生有志2名がシーサー（獅子）をかぶるという、総勢15名の舞台であった。生徒たちに緊張の様子は無く、堂々とした身のこなしを見せた。全部で5曲、アンコールにも応え、観覧の方々から賞賛の拍手を光栄にも戴くことが出来た。



〔朝日新聞記事になった写真〕



〔中学生徒会によるシーサーとドラ〕



〔附属生により「エイサー」〕



〔運天先生と記念撮影〕

「沖縄ふれあいエイサー」会場にて

緊張の頂点に達し、落ちつかなかったのは、出演の生徒ではなく、見物にきていた執行部員の保護者、応援に駆けつけてきた附属の先生と、私だったのもかもしれない。

これまで、お世話になってきた豊田黒潮エイサーの方や観覧の年輩のご婦人方の中には、沖縄出身者ではない“本土の高校生”が堂々としたエイサーを演技したことに涙を流して、喜んで下さる姿もあった。

その日、96年9月8日、沖縄では米軍基地の整理・縮小、日米地位協定見直しについて賛否を問う県民投票が行われ、日米安保体制のもとで過密な米軍基地の重圧にあえいできた沖縄の人々の圧倒的な意志が示された日であった。本土の高校生によるエイサーということが、記事にしやすかったのか2社の新聞社より取材申し込みを受け、翌日の朝刊には大きな記事で掲載された。記事に載ったことで、自信が増した事は確かであるが、不満も漏らしていた。

それは、一般生徒の目を避けて密かに練習を積み、上達したエイサーを、開会式当日に全校生徒の前で初めて披露し、皆を驚かせる目論見があったようだ。しかし、学校祭前に記事に載ることで皆の知るところになったことや、執行部員の目指すエイサーには未だとても行き着いていない練習途中の段階での、未熟なエイサーを取り上げられた事が不満であったらしい。

沖縄の歴史を考え、基地の隣で暮らす沖縄の人々を思い、お世話になった「豊田沖縄黒潮エイサー」連の方々への感謝を込め、15人の息づかいを心一つに合わせた緊張感のある「血湧き、肉踊り、骨が鳴る」エイサーを舞い踊れなかつたとでも言いたかったのだろうか。

その不満が残っていたかどうかはわからないのだが、9月25日の学校祭に向けて、更に厳しいエイサー練習を続けていた。執行部員は開会式だけを担当するわけではなく、それぞれが担当する企画の責任も多い最中にである。



頭巾

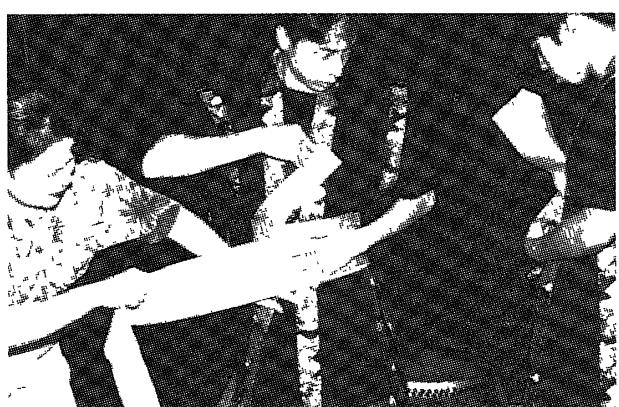
【学校祭、間近】

開会式当日まで、残り20日を切り、慌ただしくなった頃、生徒たちは豊田まで練習に出かけるゆとりが次第につくれなくなっていた。サンシンの生演奏と唄がないと「気」が入ったエイサーが踊れないと言い、豊田の先生方に無理をお願いし、学校まで来ていただいて練習する交渉をしてきた。生徒の熱意に絆された先生方に来ていただき生徒たちの夢が実現した。開会式本番で踊る体育館舞台上でサンシンの生演奏や唄、合いの手、笛を入れての本番ながらの練習となった。歌い手と太鼓の一対一のかけ合いであればともかく、サンシン1本、歌い手1人対エイサー隊15名である。全員の呼吸がなかなか合わせられず苦労したが、狭い舞台での11名の配置、客席を意識した銅鑼やシーサー4名の動き、照明やスポットライトなどを含め開会式本番を意識した練習で相当な仕上がりを見せた。

やはり生演奏での練習は「気」が入るのか、真剣そのものであった。しかし、開会式当日の登場方法は観客生徒の意表を衝く幕開けにしたいと様々なアイディアを試したが、結論は出せず持ち越しとなつた。

夏休みまでの練習も真剣ではあったが、誰かの冗談に皆で笑いあったり、和気藹々とした余裕のある雰囲気があった。しかし、舞台を使っての本番ながらの練習を経験以来、皆、無口で険しい表情で練習をするようになってきていた。緊張と興奮の舞台が迫っていたからだろうか。

舞台で使う太鼓の調整を兼ねて、教えていただきながら、全員で姫太鼓の紐の取り替え、革の貼り直しにも取り組んだ。この時、紐のかけ方一つで太鼓の音の響き具合が違うこと、紐結びの由来や太鼓の材質の違いなども知ることが出来た。



着つけ

【学校祭開会式当日・開幕直前】

当日執行部エイサー隊の集合は6時半。自主練習を行い、生演奏をしていただく豊田の先生方を待った。既にその頃には、ビデオを担いだ執行部員の保護者が集まり始めていた。「エイサーの衣装を付けるところから撮影したい」という事である。生徒の「エイサーが気になり、朝から何も喉を通らず、朝食抜きで来てしまった、エイサーが終わらないと食事もとれないほど緊張している」と言われる。出演するのは生徒であり、保護者ではないが、早朝から出向く、それ程までに応援されている事が殊の外、純粹に嬉しかった。

上着の半纏は黒地に本金糸、銀糸を散りばめた大

変高価な衣装である。それを身に纏い、白と黒のしまの脚絆を付け、髪をまとめる。最後、頭に高貴な紫の頭巾を締め長い裾を背中にたらす。装束を付けている間もサンシンの先生は気持ちを高めるためにエイサーを唄い続ける。誰も口を開くものは居らず、ただ押し黙ったままの生徒たちと保護者。静まり返った控え室の中はエイサーの唄声以外、物音一つしない静けさが張りつめていた。

全員の装束ができあがった後、一般生徒の登校前、人目を避けて一回きりの最後のリハーサルをしたが呼吸がうまく合わせられなかった。これまでの長い取り組みを考えると、直前になんでも、呼吸が合わせられないことで無念な思いで一杯であった。



浜盛先生



「花」の合唱



附中生



執行部員

〔開会式〕

【開幕】

とうとう開幕。約3カ月に渡って指導を受け、練習を積んだエイサーの初舞台。明るかった体育館の照明が落とされ、いよいよスタート。会場の皆の意表を突くような体育館北側面から登場である。気合いを込め、かけ声をかけ合い、スポットライトに照らされ、自ら打つ太鼓の音と共に舞台で舞い踊った。

沖縄の歴史を考え、基地の隣で暮らす沖縄の人々を思い、お世話になった「豊田沖縄黒潮エイサー」連の方々への感謝を込め、15人、心一つに、緊張感のある「血湧き、肉踊り、骨が鳴る」最初で最後、たった1度だけの見事なエイサーであった。何等一切ミスのない確実で完璧な演技が出来たのは練習中も含め、この舞台が初めてのことであった。成功に導いたのは、生徒たちの努力はもちろんの事、豊田黒潮エイサー会の先生方によるサンシン演奏、唄、エイサーになくてはならない指笛、貴重な衣装、それらの演出と応援があったからこそである。

後日、伺った話だが附属生が当日つけた衣装は、沖縄運天の地に代々伝わる貴重なものをわざわざ取り寄せて下さっていた。紫色〔参考〕の長い頭巾も、この日のために染め抜いて下さった。沖縄でしか染められない染料で、本土ではこの色に染め上げられないのだそうである。日差しと気温が影響する染色の技なのだろうか。“華紫”とでも例えればいいのか、赤と藍のどちらに傾いたとも形容しがたい色彩で、彩度が高く、透明感があり、然も非常に濃く強いバイオレットであった。



校長室にて



運天先生、浜盛先生、宮本先生と



学校祭マスコット はりぼて「テラー君」と



校長先生を囲んで

【参考】

〈文中、最後部「紫」色について〉

第一書房 南島文化叢書3 「沖縄染織文化の研究」

文献に現れた沖縄の古染料

B 蘇木（蘇芳、赤木、丹木）より

蘇木即ち蘇芳は、熱帯性の植物で本場はマライあたりである。日本には飛鳥時代あたりに仏教文化の移入とともに日本に知られるようになった。日本で蘇芳による染織の名が文献に出てくるのは718年の「令儀解」の中の「衣服令」の服色の記載「服色当差」がある。そこには服色を17に分けてあり、その中に「蘇芳」で染めた服色の名が取り上げられている。

蘇木は日本では沖縄南部に「先島すおう木」と称した蘇木を思わせるような植物があるが、マライあたりの物とは植物が全く違っていて、赤染の染料としては適さないようである。しかし、この先島蘇芳木については、植物学者多和田真淳氏によると、樹皮の煎汁で紅褐色を染めるとある。

蘇芳染めには明礬媒染によるものと、灰汁媒染と鉄媒染がある。それらのうちで、明礬媒染は赤色に、

灰汁媒染はやや紫味を含んだ赤、鉄媒染が暗い紫色である。鉄媒染による紫染は、紫草の根による紫染に比べ色が何となく暗く濁っていて、本紫染のような華やかさがないが、本紫染に比べると染色が容易であり、染料代が安くつくので、「にせ紫」と言ってやや安物扱いされながら、結構広く実用化されていたようである。

沖縄での蘇芳染については、沖縄が14、5世紀以来南方から蘇芳を盛んに輸入して、日本の本土に送り込んだり、輸出していたようである。染織においては、「御用布染物入り」(1690) に赤染の染料として「蘇木」を利用したとあり、これは灰汁媒染ではなく、にごり明礬、即ち緑礬（第一硫酸鉄）によると思われる。

以上要約。

…蘇芳が沖縄独特物と言うことも言えるかどうか不明である。且つ、さほどに高価な物でもなかったようだが、沖縄における紫染織の項に、私の予測していた紫についての記述は他にみつけられなかった。貝殻虫による染織技法もあるようなので、其の項についても調べてみたいと思っている。